最強の姉妹！　その３

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最強の姉妹！　その３

【Ｎコード】
Ｎ２２４９Ｖ

【作者名】
青木弘樹

【あらすじ】
三人は見事、計画を成功させる。しかしその後、三人は幸せになったのか…あるいは…？

「ど、どういうこと？」
レイラは目を見開いていた。
「ちょっと待って。最後まで聞いて。二人きりで来たんじゃないよ。あらし君と、バンドメンバーの真也君、それと彼らのファンだっていう女の子３人、計５人でここへ来たんだ」
「…」
レイラは少しほっとした。
「ただね、けっこうお酒飲んでさ、なんというか…女の子の手を握ったり、ほっぺにキスしたり、してたんだよね…」
「そ…」
レイラはショックだった。
「言わないでおこうと思ったんだけど…言わないほうがよかったかな？」
「いいえ、ショックだけど…隠されたままの方が辛いわ…ありがとうマスター」
「そ、そうか…」
「あらし…」
レイラはビールを飲み干した。
「マスター、おかわり」
「え？ああ、分かった…」
しかしマスターも、やっぱり言わないほうがよかったかなとも思った。
「あらし…変わっちゃったのかな？」
「…」
「あらし…」
涙ぐむレイラ。

「レイラちゃん…」
マスターは心配そうだった。
「ねえマスター、やっぱり…人って変わるよね？」
「…」
「今日だって…なんか冷たかったし…」
「俺も…ちょっとそう感じてる」
「…」
「音楽に対して一生懸命なのは見てて分かるけど…人気が出たことでちょっと調子に乗っている感じはするよ…。レイラちゃんの前でこんなこと言うのは失礼だけど…」
「いいえ…私もそう感じてる…」
微妙な空気が流れていた。
「ところで…その一緒に来てた女の子達って…いくつくらいだったの？」
「えっと…いくつくらいかなあ…？二十歳そこそこじゃないのかなあ。ギリギリ未成年かもって子もいたなあ」
「…」
「どうしたの？」
「男って…若い女が好きなのよね…」
「いや、そんなことないよ。ていうか、レイラちゃんかわいいし、年齢とか関係ないさ」
「絶対うそ。なんか私も２５超えたあたりから周りの扱い悪いもん」
「そんなことないって」
「ふん…」
レイラはすねているようだった。その日レイラはお酒をたくさん飲んだ。そして店が閉まる頃にはレイラはカウンターで眠ってしまっていた。そこへ、
「すいません。太陽タクシーの後藤というものですが」
五郎がやってきた。
「ああ。すいません。確かあなたはレイラちゃんのお知り合いらし

いですね？」
「ええ。いとこです」
「この通り酔いつぶれちゃって…」
「何かあったんですか？」
マスターの柴崎は事情を話した。
「なるほど…」
「そうなんですよ」
「まあ…人は変わりますよね。良くも悪くも」
「そうですね…」
「とりあえず、車まで運ぶの手伝ってもらっていいですか？」
「ええ」
柴崎と五郎はレイラをタクシーの後部座席まで運んだ。小柄なので運ぶのは楽だった。
「じゃあ、お願いします」
「はい。分りました」
五郎は車を走らせた。レイラが眠っているので安全運転を心がけた。
「うう…」
眠りながら何かを喋ろうとしているレイラ。
「あらし…」
寝言だ。
「…」
五郎は車を止めた。そしてレイラの顔をじっと見つめた。
「レイラ…」
そう。五郎はレイラが好きだった。しかしレイラがどれだけあらしを好きかも分かっている。自分の気持ちを抑えながら、五郎はやがてレイラの住むマンションの前に着いた。
五郎はマイを呼び出し、二人でレイラを部屋まで運んだ。
「すいません五郎さん。迷惑かけちゃって」
「いやあ、いいってことよ。バーのマスターにちょっと多めにお金

もらえたしね」
　五郎はおどけてみせた。
「五郎さん…」
「なんだい？」
「ううん。なんでも。まだ仕事なの？」
「ああ。これからまたレイラみたいな酔っぱらいを相手にね」
「そう…」
「マイちゃん、レイラのこと頼んだよ」
「うん。ありがとう五郎さん」
　マイはなんとなく五郎の気持ちを分かっているのかもしれない。
「じゃ、また」
「うん。またね」
　五郎は去っていった。
　マイはレイラの寝顔を見ていた。
「姉さん、もしこの先いろいろあっても…私と五郎さんがついているからね」
　眠っているレイラにつぶやくマイ。レイラは飲みすぎたとはいえ熟睡していた。やがてマイも自分の部屋に戻り眠りについた。

　それから数日後。
　今日、レイラとマイは二人で晩ご飯を食べにレストランに来ていた。一応（という言い方はかわいそうだが…）五郎も誘ったが、あいにく五郎は仕事だった。
「ふう。美味しかったね、姉さん」
「ええ。ここけっこう穴場かもね」
「いつ出来たのかな？」
「まだ1～2年じゃないかなあ？内装もきれいだし」
「そうだね」
　二人は食事を終え、街をブラブラしていた。特に買いたいものもなかったので、いわゆるウインドウショッピングだ。

「このワンピースかわいいね、姉さん」
「そうね。マイならきっと似合うよ」
「ほんとに？じゃあ、買っちゃおうかなあ」
「買っちゃいなよ」
「色は何がいいかなあ？」
「そうね…！」
ふと、レイラがある一点を見て、何か驚いているような表情だった。
「姉さん？」
マイもその方向を見てみた。
「あ…」
その視線の先には真下あらしがいた。帽子をかぶっていたが間違いない。あらしはこちらには気づいていなかった。
「ね、姉さん…」
「…」
レイラは迷った。声をかけてまた冷たくされたらどうしよう。しかしレイラはあらしと話がしたかった。言いたいこと、聞きたいことは山ほどあった。
「姉さん…」
「…」
しかしレイラの足は動かなかった。レイラはバッグの持ち手をにぎりしめた。
「よし！」
レイラは決心したようだった。だがその時、
「ごめーん、あらし。待った？」
「ああ、ちょっとだけな」
なんと知らない女性が現れ、あらしの手を握っていた。
「！！」
唖然とするレイラ。マイも言葉が出なかった。
「じゃあ、飯でも行くか」

「うん」
二人は腕を組み、どこかへ消えていった。
「…」
レイラは震えていた。
「ね、姉さん…」
マイは、やはり言葉が出なかった。何を言えばいいか思いつかなかった。
「マイ…悪いけど先に帰ってて」
「姉さん…」
「これは私の問題だから…」
「姉さん…」
「いいから、帰りなさい」
「わ、分かった…」
レイラは命令するかのようにマイに言った。マイも言い返すことができず、足早に帰っていった。
「…」
レイラはあらしの後をつけることにした。あらしが去っていった方向へ早足で向かい、あらしを探した。
「あの女…いったい…」
レイラは、とあるレストランへ入っていく二人を見つけた。レイラは思わずバッグで顔を隠した。
「前に柴崎さんが言ってた三人の女性の中の一人なのかしら…」
レイラはしばらく待ってみた。
「…」
街は賑わっている。カップルもいれば、家族連れもいる。ひとりの人もいるが、レイラは自分だけが孤独なような、情けないような、そんな気になっていた。
一時間ほどして、二人は出てきた。笑顔の二人。
「あらし…」
悲しみと怒り、二つの感情が複雑にこみ上げてきた。見つからな

いように二人をつけるレイラ。いったい私は何をやっているの？こんなことして意味あるの？そんな思いさえこみ上げてきた。
しばらくつけていくと二人はコンビニに入った。5分ほどして二人は出てきた。
「…」
レイラはだんだん空しくなってきた。帰ろうかとも思ったが、とりあえず二人をつけた。すると
「！？…」
二人はラブホテルの前で立ち止まった。見ていると、あらしが誘っていて、女は迷っているようだった。
（ど、どうしよう…！）
レイラは焦った。このまま見ているわけにもいかない。かといって出ていくのも怖かった。
女は迷っていたが、やがて承諾した様子で、二人はホテルに入ろうとした。しかしその時
「ちょっと待ちなさいよ」
「！？」
なんと向こう側からマイが現れた。
「あ…マイ…ちゃん…」
あらしは驚いていた。しかしそれ以上にレイラが驚いていた。
「あらしさん、これはどういうことよ？」
「…」
あらしは焦っていた。女も焦っていた。慌ててレイラは三人の元へと向かった。
「マイ！」
「姉さん…」
「レ、レイラ！？」
あらしは大きなリアクションで驚いた。
「？」
女は訳が分からないという感じだった。

「あ、あらし…」
レイラは何をしゃべればいいか分からなかった。
「ね、ねえ、あらし…これいったい何なの？」
女が聞いた。確かに女にしてみれば意味が分からない状況だった。
「いや…その…」
あらしは、しどろもどろだった。
「この人はあらしさんの彼女なの。そして私はこの人の妹よ」
マイが一番冷静だった。
「ほんとなの、あらし？だって彼女はいないって言ってたじゃない？」
「いや、その…」
一番焦っているのは当然だがあらしだった。
「わたし帰る。彼女さん、ごめんなさい。わたし知らなかったの」
「…」
女は帰っていった。
「…」
しばらく沈黙が続いた。
「あらしさん、どういうことか説明して」
マイが問い詰めた。マイは怒っていた。レイラはどちらかというと不安げだった。
「いや、その…」
あらしは言葉がうまく出なかった。それはそうだ。要するにただの浮気なのだから。
「あらし…」
レイラはあらしの前では強気になれなかった。それほど好きだった。大好きだったのだ。
「あらしさん、姉さんのことどう思ってるの？」
「どうって…好きだよ」
「…」
レイラは素直に喜べなかった。

「じゃあなんで浮気なんかするのよ」
「…」
黙るあらし。マイは怒っていた。大事な姉を傷つけられてとても怒っていた。
「…」
レイラはうつむいていた。あらしの顔を見ることができなかった。
「あらしさん！」
「うるせえな！」
突然、開き直るあらし。
「！？」
「仕方ないだろ？人気が出て、若い女がたくさん言い寄ってきたらそりゃあ浮気のひとつもするだろうが？」
「あらし…」
レイラはあらしを見た。悲しそうな表情で。
「先輩のミュージシャンで、もっとひどい人いるぜ！女に貢がせたりよ！俺なんてマシな方さ！」
あらしは言い放った。
「…」
マイはあらしを睨んでいた。そしてあらしに近づき
”パシッ”
あらしをビンタした。
「！！」
「あなたは最低よ！もう姉さんとは別れて。私の…私の一番大事な姉さんを傷つけたあなたは絶対許せない。もう姉さんには近寄らないで！」
マイは涙目だった。
「マイ…」
レイラは泣いていた。
「…」
ぶたれた頬を押さえながら、静かにあらしが言った。

「分かったよ。じゃあなレイラ…」
あらしはゆっくり去っていった。
「…」
少し興奮していたマイは我にかえり、レイラに言った。
「ごめん姉さん…余計なことして…。けど…けど私…」
「ううん。いいのよマイ」
「姉さん…」
「あなたがいなかったら…きっと私はあらしを許してしまっていた。そしてまた浮気されて…そんなズルズルした関係を続けていたに違いないわ」
「姉さん…」
「ありがとうマイ。あなたがいて本当によかった」
「姉さん…」
マイは涙を流した。そしてレイラとマイは抱き合った。ふたりの絆はよりいっそう深まったに違いない。これからも、今まで通り、いや今まで以上に、ふたりで力を合わせて生きていくだろう。

そして二週間後。
「レイラ、俺と…俺と付き合ってくれ！」
突然の五郎の告白。しかし目の前にはマイがいた。
「…うん。シンプルでいいと思う」
「そ、そっか…」
五郎は照れていた。
「その調子で本番も頑張ってね」
「あ、ああ…」
マイは五郎に言ったのだ。思い切ってレイラに告白しよう、と。
「今の五郎さんなら大丈夫。ちゃんと働いているし、ギャンブルもしないし」
「そうかなあ…自信ないなあ…」
「大丈夫よ」

五郎はマイに背中を押されレイラに告白することにした。レイラはあれ以来元気がなかったが、最近は少しずつ元気になっていた。もちろんマイが日々、元気づけたからというのもあるが。
「じゃあ今日うちに来てね」
「あ、ああ…」
「五郎さん。しっかり！男でしょ？」
「…。マイちゃん…ちょっと性格変わった？」
「え？そんなことないよ」
しかし五郎は思った。マイは少し強くなったんじゃないかと。昔はあまり積極的に自分の意見を押し付ける感じではなかった。もちろん、それが不服というわけではないが。
「じゃあね」
「ああ」
マイは帰っていった。
「…」
五郎はまだ迷っていたが、マイの言うことも確かだ。当たって砕けろ。俺は男だ！的な考えも持つようになっていた。と言いつつ、時間が近づくたび緊張は増していた。

そして夜。
「おまちどおさまあ」
マイは、大金を手に入れた後、けっこう高いオーブンレンジを買っていた。そのオーブンレンジで作った色々なパンをレイラと五郎に振舞った。
「すごーい！美味しそう」
笑顔のレイラ。
「ほう。こりゃ美味そうだ」
たくさんのパンに見入る五郎。
「ふふふ。今日はちょっと頑張っちゃった」
「マイがパン作りが趣味なのは知ってたけど、すごいね。これなら

お店出来るよ」
「ふふふ」
「よし！じゃあ、さっそくいただきまーす」
「あんた、手は洗ったの？」
「洗ったさあ。いただきまーす！」
五郎は妙にハイテンションだった。自分で自分の背中を押すかのように。
「美味しい！マイ、これすごく美味しいよ！」
「ありがと、姉さん」
笑顔のマイ。その後、三人はたくさんのパンを仲良く平らげた。そして、たわいもない世間話を小一時間ほどしていた。そんな中、マイは急に立ち上がり、レイラに気づかれないように五郎に目で合図を送り、言った。
「あ！忘れてた！」
「どうしたの、マイ？」
「この間、友達にＣＤ借りてね、返す返すって言ってて、でもなかなか返せなくて、いい加減早く返してって催促されてたの」
「ふーん」
「ごめん、姉さん、五郎さん、ちょっと返してくるね」
「え？今から？」
「うん。ごめんね。ちょっと行ってくるね」
若干、不自然だったが、マイはそう言うと足早に出ていった。
「そんな急がなくてもいいのに…」
「そ、そうだよな…」
五郎は緊張していた。
「でも珍しい。マイは几帳面だから、あんまりこんなことないのにな」
「ま、まあ人間そういうこともあるさ」
「あんたに言われたらおしまいね」
「ははは…」

いつものように茶化して言い返さない五郎。もう一度言うが五郎は緊張していた。沈黙があってはまずいと思った五郎は必死に話題を考え、やがて話し出した。
「そういえばさ、最近マイちゃんちょっと変わったよな」
「そう？」
「ああ。なんつーか…しっかりしてきたっていうか…大人になったっていうか…」
「マイも、もう25だからね。そうかもね」
「女っぽくもなったよな？胸も大きくなったんじゃないかな？」
五郎は思わず茶化した。
「え？もしかして五郎さん、マイのこと好きなの？」
「ち、違うよ！」
「ああー、それであの時あんなやらしい格好させたんだね。あのじいさんのせいにして」
「違うって！あれは作戦だよ！現にじいさん泥棒に入られたこと、気づかなかったじゃん」
「ふーん…」
「だってな…、俺には…俺には好きな人がいるんだ」
唐突に本題に入った。しかしそれでよかったのかもしれない。ダラダラ無駄話しても意味はない。
「そうなんだ。タクシーの客をナンパでもしたの？」
「違うよ…」
「ふーん」
レイラは五郎の気持ちには気づいてないようだ。
「なあレイラ」
五郎は真剣な表情になった。
「なに？」
「あのな…俺が好きなのは…」
「…？」
「俺が好きなのは…お前なんだよレイラ」

「！？」

その頃。マイは近くのコンビニで雑誌を立ち読みしていた。友達にCDを返しに行くというのはもちろん嘘。マイは雑誌を見ながら少しドキドキしていた。

「五郎さん、うまくいったかなあ…」

そして、その時である。店の外からマイを見る人影があった。マイの顔を見たその人物はニヤけていた。いったい何者か？マイはそんな人物がいることなど知る由もなかった。

「え？」

「だからさ…俺はお前が好きなんだよ」

もう緊張していても恥ずかしがっていても仕方ない。五郎は少し強気になった。

「え？そんな…」

レイラは驚いていた。考えてもいなかったことだった。

「悪かったな。俺みたいなのが好きになってよ」

「そ、そんなことはないけど…」

いつもは五郎を小馬鹿にするレイラも、突然のことに控えめになった。

「それで…返事は？」

「え？」

「俺はお前が好きなんだ。付き合ってくれ」

「！？」

頭が真っ白になるレイラ。

「…」

五郎は腹をくくっていた。今さらしのごの言っても仕方ない。強気でいくしかない。

「あの…」

レイラは急に女の顔になった。

「…」
五郎はそんなレイラの表情に、一瞬ドキッとした。
「だって…突然そんなこと言われても…」
「突然言うしかないだろう。こんなことはさ」
「そうかもしれないけど…」
「俺はさ、あらし君に比べたらかっこよくもないし、なんの才能もないけどさ、けどお前を好きな気持ちは誰にも負けないぜ」
「…」
「とにかくさ、気持ちは伝えたから、返事はちゃんとくれよ」
「…」
「なんだよ？駄目なら駄目でしかたないさ」
「だって…いとこだし…」
「いとこどうしが恋愛しちゃいけないなんて法律はないぜ」
「そうだけど…」
レイラは迷っていた。しかし五郎にとっては意外だった。あっさり振られると思っていたからだ。
「じゃあ明日…いや明日は仕事がちょっと忙しいな…。明後日だ。明後日また来るから返事くれよ」
「…」
「なんだよ。明後日、空いてないのか？」
「わ、分かったわ」
「じゃあ、そういうことでよろしくなっ」
五郎は部屋から出た。強気に振舞っていた五郎だったが、内心焦りまくりだった。頭がパンクしないうちに立ち去らないとまずいと思った五郎は急いで外に出た。
「…」
一方のレイラも頭が混乱していた。いつもの強気な態度もなく、またいつもと違って男らしい五郎に少し驚いていた。
しばらくしてマイが帰ってきた。

「ただいまー。あれ？五郎さんは？」
「…」
「あ、姉さん。ねえ、どうだった？」
「どうだったじゃないわよ。あんた騙したわね」
「ごめん。でも五郎さんはいい人よ。仕事も頑張ってるし」
「泥棒やらしといていい人じゃないわよ、まったく…」
「ふふふ、いいじゃない。どうせ悪人相手だったんだし」
「…。マイ、あんたやっぱちょっと変わったね」
「そう？」
「そうよ」
「人は変わるのよ、姉さん」
「…」
レイラは少し呆れていたが、少し嬉しい気持ちもあった。
「それで、ＯＫしたの？」
「まだよ。明後日また来るって。その時返事くれって…」
「そうなんだ。楽しみだなあ」
「…」
レイラはマイの楽しそうな表情にやはり呆れた。しかしあらしと別れて落ち込んでいた気分はすっかりなくなっていた。なぜかは分からないが、すごく気分がすっきりしていた。

そして運命（？）の日。
「さあ！煮るなり焼くなり好きにしやがれ！」
「何言ってんのよ…」
五郎はもはや当たって砕けろ精神、満開だった。
「ところでマイちゃんは？」
「マイは出掛けてるわ」
「そうか」
しかし実はこれは嘘だった。マイは隣の部屋に隠れていた。そしてこっそり壁に耳をあて、二人の会話を聞いていた。

「それでね…」
レイラが話し出した。
「…」
緊張の一瞬である。
「考えたんだけど…」
「…」
「付き合ってあげてもいいわよ」
レイラは上から目線で言った。これは照れ隠しもある。
「ほんとに！？」
「ええ」
「やったあ！」
素直に喜ぶ五郎。レイラはその姿を見て少し嬉しかった。
「ま、まあ、あんたみたいな人、他に誰もつきあってくれないだろうしね」
「ありがとうレイラ」
五郎は思わずレイラに抱きついた。
「ちょ、ちょっと…」
レイラは焦った。が、突き放しはしなかった。
「ありがとうレイラ！嬉しいよ」
「もう…」
と言いながらもレイラも嬉しそうだった。そこへ
「おめでとう！」
”パンッ”
マイが入ってきた。そしてクラッカーを鳴らした。
「あれ？マイちゃん？」
五郎は驚いた。
「ちょっと…！マイ…」
レイラも驚いた。クラッカーに驚いたのだ。
「やったね！五郎さん！姉さんをよろしくね！」
「お、おう。任せとけって」

「びっくりさせないでよ…」
「いいの、いいの！」
マイが一番嬉しそうだった。おそらくあらしと別れて寂しそうなレイラをずっと見ていたのが辛かったのだろう。マイは満面の笑顔だった。
これですべて一件落着…のはずだったのだが…。

数日後。
レイラとマイは、映画を観に行っていた。
「面白かったね、姉さん」
「ええ」
「続編があったらまた観に行こっか？」
「そうね」
仲良く歩く二人。そして…その二人をつけている人物がいた。
「明日は雨かなあ…」
「そうね。ちょっと曇ってるわね」
人通りが少ないところに差し掛かった二人。その時
「すいません…」
後ろから老人が話しかけてきた。
「はい？…！？」
振り返ったマイは青ざめた。
「こんばんは…白川ゆきさん…。久しぶりだね」
「！！」
レイラも青ざめた。
そこには…あの竹野内源太がいた！

つづく★

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2249v/

最強の姉妹！　その３

2011年7月27日03時27分発行